

中長期目標 (学校ビジョン)	自立と社会参加をめざし、より豊かに生きる力を育む学校				今年度の 重点目標	1 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 2 保護者や地域の期待と願いに応える【自立と社会参加】 3 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】 4 センターの機能を推進する【チーム鳥養の推進】		
年 度 当 初						(3)月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策
1 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】	小学部	○自分らしさを発揮し、意欲的に学ぶ授業づくり	○各クラスが、児童の興味関心や発達段階を考慮した授業づくりに取り組んでいるが、複数の教員での目標設定の検討が十分ではない。	○実践した授業を複数の教職員で評価し、授業改善に努めている。	○学部会の中で授業づくりについて話し合える場を設け、教職員の意見が交わるようにする。 ○学級事務日などを利用して、実践した授業の写真やビデオを複数の教職員で見合い、授業改善につながる検討を行う。 ○教職員アンケートをとり、目標達成度を評価する。	○日常的に授業について話し合ったり、互いにアドバイスをしたりして授業改善に努めた。 ○児童の学習や生活の様子の写真を複数の教職員で見合い、授業や児童についての評価、情報交換等を行った。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は63%だった。	B	○授業改善に向けて、他クラスの授業を参観したり、授業のビデオを見合ったりする機会を増やす方法について検討する。
	中学部	○一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	○生徒がどのような学習を積み上げてきたかの履歴が把握しにくい。	○目標設定や評価の妥当性について検討した授業づくりがなされている。 ○重複障がい学級の学びの履歴が残されている。	○学部内で調整して、学習グループで授業を見合う機会を年3回以上確保する。 ○学部会や学級事務日などを利用して、教材教具を見合う会を年3回以上設ける。 ○教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○学習グループで授業を見合う機会を、単一会、重複会、学部での勉強会として定期的に持った。その中で授業づくりの情報交換を行った。 ○教材教具を見合う会を年3回設けた。 ○重複障がい学級の学びの履歴として、使用した絵本や教材などを記録として残した。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は73%だった。	B	○目標設定や評価の妥当性について検討した授業づくりに取り組む。 ○学びの履歴をどのような形式で、どのように残していくかを検討する。
	高等部	○表出・表現力と課題解決力を高める授業づくり	○重複障がい学級では、生活年齢に応じた指導内容の検討が必要である。 ○単一障がい学級では、基礎学力の定着を目指した授業に取り組んでいるが主体的に課題を解決する指導方法の検討も必要である。	○生活年齢に応じた指導の検討がなされている。 ○単一障がい学級で、生徒が主体的に課題を解決する指導方法の検討がなされている。	○学部会で生活年齢に応じた指導を学ぶミニ研修会を毎回行う。 ○子どもを語る会や学部会の機会を利用してお互いの実践について検討する。 ○生徒の興味関心を高めたり、主体的な取り組みを引き出したりするために参加型授業を取り入れる。 ○教職員アンケートの結果で目標達成度を評価する。	○学部会でミニ研修会を行い、生徒理解及び指導についての知識、技能を高める取り組みができた。 ○生徒の変容や指導上の課題について、クラス、コース単位で話し合いやケース検討を行うことができた。 ○生徒が意見を出し合って課題を解決しようとする姿勢が見られるようになった。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は90%だった。	A	○学部会でのミニ研修会やケース検討などの取り組みを継続していく。 ○生徒の指導上の課題に合わせた研修会や話し合いの機会を計画的に実施する。
	教務部	○連続性、系統性のある個別の指導計画の作成	○個別の指導計画の内容が整理、改善されつつあるが、指導の連続性や系統性に課題がある。	○こころ、からだ、せいけいの視点の下に連続性、系統性を意識した「個別の指導計画」が作成されている。(作成率70%以上)	○年4回教科領域の会(註1)等で指導内容の連続性、系統性について情報交換や検討を行う。 ○「個別の指導計画」のフェイスシートを「こころ」「からだ」「せいけい」の視点に分けて記述する。	○教科領域の会を3回実施し、各学部での取り組みや課題について情報共有し、来年度の学習内容の見直しにつなげることができた。 ○指導の連続性、系統性を意識した「個別の指導計画」の作成にはもう少し時間が必要である。 ○個別の指導計画作成にあたって、自立活動の目標設定に関する研修と小グループでの複数回の検討を行ったことで、実態把握や目標設定の過程の理解が進んだ。	B	○教科領域の会を継続して行い、系統性を踏まえた指導の在り方を研究研修部と連携を図りながら検討を行っていく。
	研究研修部	○児童生徒の自立をめざした目標設定の工夫	○教育的ニーズを踏まえた目標設定の方法が明確ではない。	○一人一授業に取組み、児童生徒一人一人の実態把握と教育的ニーズを踏まえた目標設定を基にした授業を行っている。(目標値90%以上)	○一人一授業を利用して、目標設定を基にした授業を行う。	○一人一授業の実施率は98%で、目標値が達成された。 ○一人一授業の実践を通して、授業目標が実態把握による教育的ニーズを踏まえたものとなるように各自が努力した。 ○発達段階に応じた目標設定や具体的な目標設定をすることの大切さが理解されてきている。	B	○教育的ニーズを的確に把握した授業を行うために、児童生徒の実態別にグループで話し合う機会を設ける。 ○教務部と連携して、実践が「とりようの『まなび』」と諸計画のつながりを意識したものになるように取り組む。
情報教育部	○ICTを活用した授業実践の推進と充実	○単発的な実践事例は多くあるが、児童生徒の変容がわかるまで長期に取り組んだ実践報告が少ない。	○ICTを活用した授業の実践報告を行う。(目標値70%以上)	○教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した実践報告を行う。(授業実践一人一事例報告) ○学習保障事業(オリヒメ)を推進する。	○ICT支援員(註2)、SE(註3)等関係機関と連携し、研修会、実践例の報告、アプリの紹介等個々の課題やニーズに合った支援の活用が浸透してきている。 ○一人一実践報告はアンケート形式による状況把握に変えた。 ○オリヒメ(註4)の活用は各学部1名の児童生徒が活用し、活用実践も徐々に増えてきている。	B	○関係機関との連携を継続強化するとともに、ニーズに応じた研修会等を実施していく。実践事例はデータベース化をしてICTの活用をしやすくする。 ○オリヒメの使用マニュアルを作成し、活用を推進する。	
2 保護者や地域の期待と願いに応える【自立と社会参加】	小学部	○保護者や関係機関と連携した指導支援の充実	○外部機関(註5)からの指導や支援を受ける機会が増えてきているが、事前事後の連絡調整に課題がある。	○外部機関との事前事後の連絡調整が整っている。	○外部機関からの指導や支援についてのねらいや目的を確認する機会を設ける。また、それらの機会が活用できるように計画を立てる。 ○教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○外部機関との連絡調整をスムーズに行うことができ、児童の実態や目標について共通理解しながら支援を受けることができた。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は68%だった。	A	○外部機関の支援の記録を整理して連携強化を進めるとともにそれぞれの役割を明確化する。
	中学部	○自己実現に向けた指導・支援を行うための連携の在り方	○一人一人の自立と社会参加に向け、情報収集しながら共通理解を図っている。 ○保護者個々のニーズに応じた情報提供や関係機関との連携が必要である。	○本人・保護者・関係機関(註6)・学校関係者が描く生徒一人一人の自立と社会参加の具体的なイメージが共通している。	○個のニーズを把握して最新の情報が収集できるよう校内の人材を活用し、年2回学部会などで情報交換する。 ○保護者それぞれが持つ情報を相互に交換できるように、参観日の学部懇談に位置づける。 ○教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○支援部の協力を得て、福祉や就労に関する情報交換会を2回行った。 ○施設利用体験説明会で、キャリア教育部の協力を得て保護者同士が情報交換できる場を設けた。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は74%だった。	A	○職場体験や施設利用体験についての生徒、保護者のニーズを職員で共通理解を図るとともに、その在り方を検討していく。
	高等部	○進路実現を図るための支援体制づくり	○高等部卒業後の進路として生活介護から一般就労、進学など多様であり、それぞれの進路に応じた支援が必要である。	○それぞれの進路に応じた連携した支援が行われている。	○本人、保護者からの進路に関する要望を聞き取り、その実現のための計画を本人、保護者、担任および進路担当教員と連携して実行していく。 ○3年生の進路決定先及び保護者アンケートで目標達成度を評価する。	○本人及び保護者と進路に関する話し合いの場を設定し、希望に応じた施設利用体験や職場体験の機会を設定することができた。体験後は成果と課題を確認したことで、その後の学習に生かすことができた。 ○外部専門機関の協力を得ながら、進路に関する必要な情報を本人及び保護者に提供することができた。 ○保護者アンケートによる目標達成度は86%だった。	B	○進路実現のための計画に本人、保護者、担任、進路担当教員が連携して取り組むことを継続していく。 ○移行支援に向けて個別に支援の内容を検討する機会を設定する。 ○生徒の状況について、情報共有できる機会を適宜設定し、生じている課題を高等部全体で解決していけるようにする。
	文化部	○一人一人の学びや力が発揮できる学習発表会の実現	○昨年度から分散型の発表会形式に変えたことから、児童生徒の実態に合った発表会となった。 ○発表会の形式やねらいの変更の意義が教職員や保護者に十分に伝わっていない。	○一人一人の学習の積み重ねや良さを引き出し、人とのつながりが感じられる学習発表会が実施されていると感じている。(目標値70%以上)	○発表会の新名称を提案し、ねらいを学校便り等で保護者に伝える。 ○保護者、教職員にアンケートを実施し、取組みの評価を行う。	○「学習発表」から「とりようわくわくフェスタ」に名称を変え、新しい取り組みが進んだ。 ○教職員、保護者から一人一人の学習の積み重ねや良さが引き出された発表だったと高評価だった。	A	○「とりようわくわくフェスタ」では、午後からも参加率が上がる活動について協議と検討を行う。
	自立活動部	○児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	○お役立ち勉強会(自主勉強会)や「自立活動だより」等で、自立活動の指導に関する情報を定期的に提供している。 ○自立活動の目標設定の手続きについて昨年度末に共通理解を図るための勉強会を実施したが、まだ十分とは言えない。	○児童生徒の実態を的確に捉え、適切な目標設定ができるための勉強会をしている。 ○日々の授業実践に役立つ情報を提供している。	○自立活動の目標設定や指導内容の充実に関する勉強会を年2回以上実施する。 ○自立活動夏季勉強会(註7)、自立活動研修会(註8)、お役立ち勉強会等を通じて、実践に役立つ情報を年7回提供する。	○新学習指導要領に基づいた自立活動の目標設定に関する校内勉強会を2回実施した。手続きについて校内で共通理解を図るきっかけになった。 ○各種研修・勉強会を計画通り7回実施した。アンケートから、日々の指導に役立っているという意見が多く挙がっている。	B	○自立活動の目標設定の難しさや不安感ができるだけ解消されるよう、自立活動部員や外部講師によって継続的に研修を行う。 ○引き続き、研修・勉強会を通じて実践に役立つ情報を提供する。
キャリア教育部	○収集した情報の発信	○新たに収集した事業所等の情報を更新して冊子にまとめているが、閲覧頻度が低調である。 ○人権教育や進路に関する情報提供が十分ではない。	○「学校の1日」(註9)で事業所等の情報がいつでも知りたいときにすぐに閲覧できるようにする。 ○「学校の1日」で人権教育やキャリア教育の実践に関する情報が閲覧できるようにする。	○情報教育部と連携し、「学校の1日」に事業所に関する欄と人権教育やキャリア教育の実践に関する欄を作る。 ○事業所に関する情報は年1回以上、人権教育・キャリア教育の取組みについては年3回以上更新する。	○「学校の一日」に「事業所情報」「人権教育・キャリア教育」の欄を作り、校内の教職員に情報提供ができるようにした。「事業所情報」では、平成29年度に更新した情報とパンフレットのPDFをフォルダの中に入れるようにしている。 ○「事業所情報」のファイルにタグを付け、生活介護及び児童デイサービスと就労系に分けて活用しやすくした。 ○本校のキャリア教育について、研修や話し合いを通して教職員が共通理解をして取り組むようにした。	B	○わかりやすく見やすい情報の更新を適宜行う。 ○職員全体で共有しなければならない情報は何かを整理して、職員に提示する。	

年		度		当	初	(3)月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策
3 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】	小学部	体調に配慮した教室環境づくり	○体調を崩しやすい児童が多いので家庭との連携し、障がいに応じた環境調整を行っている。今後も家庭と連携して教室環境の調整を図る必要がある。	○体調に配慮した教室環境づくりをしている。(目標値90%以上)	○学部内で教室環境を改善するアイデアを募り、良いアイデアが教室環境の調整に活かされるようにする。 ○学部朝礼や学部会などを利用して、児童の体調の変化に気づくことができるよう、児童の体調変化のサインについて共通理解する機会をもつ。 ○教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○児童の体調をていねいに観察し、室温調節や明るさの調節に取り組むことができた。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は74%だった。	A	○他の教室の様子を見合い、教室環境の改善に向けたアイデアを出す機会の設定に努める。 ○教室環境が児童の実態に合っているか、定期的に机椅子のサイズや教材の配置等を確認し、必要に応じて改善を図る。
	中学部	○生徒が安心感の中でより主体的に活動できる教室環境の整備	○心と身体の変化に気付き、原因と対策を保護者と情報交換しながら行っている。思春期に入り、心と身体バランスが崩れやすい時期であり、体調を崩すと長引きやすい生徒が多い。	○一人一人に合った健康観察のポイントを学部内で情報交換ができている。 ○安全な教室環境となり、支援に必要な物品が整っている。	○学部会で年2回以上健康観察のポイントの情報交換を行う。 ○教室環境や支援に必要な物品の整備をどう進めたかについて、学部会で各クラス1事例の報告を行う。	○健康観察のポイントについて定期的に情報交換する機会を持った。今後はポイントの理解からなぜ必要なのかの理解を深める必要がある。 ○グループで話し合う場所(教室)をローテーションにしたことで、教室環境を見合う機会となり、他の教室を参考にして安全な教室環境に努めるようになった。 ○必要な支援物品を要求して整えた。	B	○生徒の体調管理には健康観察がとても大切なので、学部会などで養護教諭から学ぶ機会を設ける。
	高等部	○生徒が安心して学べる教室環境づくり	○重複障がい学級の生徒は、体調面が不安定である。感染や病状の悪化などによって、一度体調を崩すと回復までに時間を多く要する場合がある。 ○単一障がい学級の生徒は、不安やストレスに弱く、体調不良を訴えることが少なくない。	○安全点検を行い、教室環境の衛生管理や改善を適宜行っている。 ○生徒の健康を維持できるように、適度な運動やストレッチ、リラクセーション、認知への働きかけを継続して行っている。	○心と身体の健康を維持するための方法について学部内で共通理解を図る。 ○生徒の様子を観察、医療的ケア(註9)、服薬時で得た情報は、担任、養護教諭、学校看護師等で共有して対応する。 ○教職員アンケート及び保護者アンケートをとり、目標達成度を評価する。	○生徒の体調の変化を見過ごさないように、担任間や養護教諭と適宜情報共有をしながら対応することができた。 ○学習環境及び教室環境を整える取り組みを適宜行うことができた。 ○問題が生じた際は、報告・連絡・相談を迅速かつ丁寧におこなうことができ、適切に解決の手立てを講じることができた。 ○生徒の健康を維持する働きかけについては、教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は92%だった。 ○保護者アンケートでは79%だった。	A	○学部内で健康を維持する方法の共通理解や生徒の情報共有を継続して行い、生徒の体調の変化をいち早く把握して対応できるようにする。
	保健安全部	○児童生徒が安全で快適な生活を送ることができる体制づくり	○火災、地震などの避難訓練、不審者対応訓練、救急訓練などを行ったり、医学講座等の研修会を行ったりして、教職員の安全意識や医療に関する知識の向上を図っている。 ○緊急時の避難の方法や児童生徒への対応などについて職員間でより連携のとれた取り組みを進める必要がある。	○安全な環境づくりに取り組むとともに避難体制・緊急時の対応方法を教職員が共有している。(目標値:教職員の70%以上)	○訓練の反省や研修会の感想などをもとに、日常の学校生活の中でできることや活かせることをまとめて教職員向けの情報を発信する。 ○防災委員会や医療的ケア検討委員会などと連携して防災・防犯のための環境づくりや教職員の医療や救急対応に関する知識向上のために研修できる機会を設定する。	○各訓練・研修等の助言やアンケートからの意見など通信という形にまとめて発行できた。 ○防災委員会との連携で防災グッズなどの整備が進んできた。 ○拡大保健委員会を通して、本校の感染症等の予防のためのマニュアルを作成した。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は72%だった。	B	○情報の共有はできたが、より実際場面につながる訓練の取り組みを進める。 ○整備を進めた防災グッズの活用や保管などについて検討して取り組む。
4 センターの機能を推進する【チーム鳥養の推進】	支援部	○地域におけるセンター的機能の充実	○相談支援の状況や特別支援教育研修会、交流及び共同学習等、本校が取り組んでいるセンター的機能(註10)について職員全体へ周知できていない現状がある。 ○障がいの状態に応じて安心して学校生活が送れるように、関係機関と連携をとりながら就学に係る相談体制を整える必要がある。	○教職員が本校が取り組んでいるセンター的機能について理解している。(目標値:教職員の70%以上) ○関係機関と連携をとりながら就学に係る相談を行っている。	○掲示板や職員会等で本校が行っているセンター的機能の取り組みについて報告する機会を設ける。 ○自立活動部やエキスパート教員等、校内の専門性を活用しながら様々な相談活動に対して、チームで対応していく。 ○教職員アンケートをとり、目標達成度を評価する。	○「センター的機能」の具体的な取り組みについて、白板や掲示板を通して報告しているので、周知・理解が広まってきている。 ○就学に係る相談を学校のチームで対応するようにした。 ○教職員アンケートで目標を十分に達成したと評価した割合は69%だった。	B	○引き続き白板や掲示板を通しての周知・理解を進める。 ○支援部だよりや職員会議の場を利用して学期末・年度末の取り組み状況を報告し、本校が取り組んでいるセンター的機能について教職員の理解を高める。
	キャリア教育部	○学校説明会での本校教育の情報発信	○学校説明会(註11)で本校の教育についての情報が提供されている。	○学校説明会で本校教育の情報提供して理解を深める。(目標値70%以上)	○参加者アンケートを実施して、工夫・改善に努める。 ○ホームページに進路のページを作り、学校の様子を伝えていく。	○支援部と連携した便りを発行し、キャリア教育や人権教育に関する取り組みの情報提供をした。 ○本校のキャリア教育の取組について、11月の学習公開日に学部・学級懇談で保護者へ説明して情報発信の場を持つことはできた。 ○保護者アンケートで福祉サービスに関する情報提供が少ないという声があった。	B	○ホームページで発信していく内容を検討して取り組む。 ○引き続き鳥取養護学校のキャリア教育に関する情報発信を行う。 ○本校のキャリア教育の取組について、11月の学習公開日に学部・学級懇談で保護者へ説明して情報発信の場を持つことはできた。 ○福祉サービスについてどのような内容を知りたいのか、どのように情報提供すればいいかなどについて保護者アンケートを取り、改善に努める。

A:十分達成(90%以上または目標値以上) B:おおむね達成(70～90%未満または目標値の70～90%未満) C:できつつある(40～70%未満または目標値の40～70%未満) D変化の兆し(20%～40%未満または目標値の20%～40%未満) E:まだ不十分(20%未満または目標値の20%未満)

用語解説

註1：教科領域の会 国語や社会などや特別活動、総合的な学習の時間など教科・領域の指導について相談し、専門性を高め合うことを目指した会。

註2：ICT支援員 ICTを活用した授業等の支援を行う専門家。

註3：SE 「システムエンジニア」の略語。システムの設計・開発・テストを手がける職種のこと。

註4：オリヒメ カメラ・マイク・スピーカーが搭載された分身ロボットのこと。インターネットを通して操作ができ、あたかもその人がそこにいるように会話ができる。

註5：外部機関 福祉制度により学校に赴いて児童生徒の支援に係る理学療法士や言語聴覚士が属する機関のこと。

註6：関係機関 児童生徒の支援に係る医療、福祉機関のこと。

註7：自立活動夏季研修会 夏休み中の2日間、講師の指導助言のもとからだの動きや身体運動について学ぶ研修会のこと。

註8：学校の日 学校の行事予定や連絡事項など職員に必要と思われる情報が掲載されたイントラネットの掲示板のこと。

註9：医療的ケア 医師の指導の下に、看護師や保護者が日常的・応急的に行っている経管栄養、たんの吸引等の医行為のこと。

註10：センター的機能 特別支援教育の充実のために特別支援学校に求められる機能のこと。特別支援教育に関する相談や情報発信、小中学校への支援等がある。

註11：学校説明会 本校を就学・進学先に考えている保護者向けに毎年6月に開く、就学、進学に関する説明会のこと。